

成人発達理論の再検討 — 役割移行を前提としない現代成人の語りを通して —

1. 研究の背景と問題意識

従来の成人発達研究は、就職、結婚、出産、育児といった「外的なライフイベント」や「役割移行」を主要な発達の契機と見なしてきた。しかし、現代社会では非婚、DINKs、転職の反復、学び直し、親の介護など、生き方そのものが多様化しており、既存の理論が想定する標準的な役割移行を経験しないまま成人期を過ごす層が増大している。本研究では、明示的な外的転機がなくとも進行する内的な価値観や自己概念の再編成を「役割移行なき発達」と定義し、その構造を解明することを目的とする。

2. 理論的背景：成人発達のダイナミズム

成人期のアイデンティティは青年期で完結せず、生涯を通じて「再構成」され続けるプロセスである。本研究は以下の理論的枠組みを基盤とする。

2.1 ライフサイクルと生活構造(D. レビンソン)

成人発達を「安定期(生活構造の構築)」と「過渡期(構造の終止・評価・模索)」の交互の繰り返しとして捉える。

- 生活構造の5要素：〈夢〉、職業、結婚・家庭、メンター、友情。
- 中年期の個性化：「若さと老い」「男らしさと女らしさ」「破壊と創造」「愛着と分離」という4つの両極性を高い次元で統合し、内面的な自由を獲得するプロセス。

2.2 アイデンティティのラセン式発達モデル(岡本裕子)

アイデンティティを「個としての発達」と「関係性の成熟」の二軸で捉え、危機と再体制化の循環を提唱する。

- 二軸の入れ子構造：具体的な社会的関係性の吟味を通じて、内在化された他者像(個体内関係性)が修正される。
- 危機の意義：「これまでの自分ではやっていけない」という感覚に耐え、過去と現在を折り合わせることで、より高次元な自己(ラセン状の深化)が獲得される。

3. 現代における成人発達の類型と先行知見

先行研究に基づき、現代的なライフコースにおける発達の様相を以下のように整理する。| 類型・視点 | 主な発達的特徴・知見 || ----- | ----- || 非婚キャリア型 | 仕事を通じた「個の確立」に加え、内的な生活構造の再編成による自己統合が幸福感の鍵となる。 || 子どもをもたない女性 | 「喪失」の受容を経て、他者や社会へのケア(ジェネラティヴィティ)へ関心を転換させるプロセスが存在する。 || 役割の質的側面 | 役割の有無よりも、各年代に応じた「役割達成感」が心理的ウェルビーイングを規定する。 || 救済の連鎖 | 過去の苦い経験をポジティブな成果に結びつけるナラティブ(語り)が、精神的健康と強く相関する。 |

4. 研究目的と方法論

現代成人のライフコースを可視化・類型化し、その再構成プロセスを明らかにするため、「現代版：ライフサイクルの木」の構築を目指す。

4.1 調査対象とデータ収集

- 対象: 30代～50代の成人(典型的ライフコース群、非婚群、転職・学び直し群、離婚・介護経験群など)。
- 手法: 文献、SNS、ブログ、エッセイ等の収集および、半構造化インタビュー(伝記的面接法)の実施。
- 聴取項目: ライフヒストリー、人生の意味づけ、転機の主観的解釈、将来展望。

4.2 分析アプローチ

多面的な理解のため、以下の手法を組み合わせる。

1. ナラティブ分析: 語りの整合一貫性(時間的・因果的・主題的・状況的)から自己の連続性を分析。
2. **TEM**(複線径路等至性モデリング): 人生経路の分岐点と、再構成に至るプロセスを可視化。
3. **M-GTA**: 「発達感」「停滞感」「自己再構成」等の共通概念を抽出し、プロセスモデルを生成。
4. レビンソン理論との比較: 現代の非典型的ライフコースにおいても、従来の「発達段階」や「過渡期」が見出されるのかを検証。

5. 本研究の意義

- 理論的意義: レビンソンの「生活構造」や岡本の「アイデンティティ再体制化」を現代社会の文脈で更新し、外的転機を伴わない発達モデルを提示する。
- 臨床的意義: キャリア支援や中年期支援において、当事者が自身の経験を意味づけ直し、ライフキャリア・レジリエンスを高めるための理論的基盤を提供する。
- 社会的意義: 多様化するライフスタイルにおける「大人になること」の曖昧さを解消し、各ライフステージにおける新たな発達課題を明示する。